

卒業式における学内連携について

— 短期大学部と大学の合同演奏の試み —

井 中 あけみ

はじめに

「連携」が大切な時代ではあるが、同じ大学であっても、日頃学内の活動や授業等は当然のことながら、短期大学部・大学は全く別行動である。年に一度の大学祭が唯一の合同行事であるが、対外的に見れば、お祭りの要素が非常に強い行事と感じられていることであろう。

学内連携に関連して「卒業式に何か発表できるものはないか」という意見が、ある会議で上がった。卒業式は、近隣や地域の方々に参加して頂く行事といえる。卒業式にふさわしい文化的な催し事を考えていく中で、「音楽」という意見が自然と浮かぶ状況となり、今回の試みにつながった。

それまでの卒業式でも「思い出」と題した映像が、そのスクリーンスタッフ達によって編集され、卒業式会場壇上のスクリーンで映し出され、そこにはその年に流行した歌謡曲などが流された。大変思い出深いそれぞれの場面が「曲」に見事にマッチングしていたことには誰もが感動を覚えたはずである。しかし今回このような意見が出されたことには「連携」という意識が大きく関与している。勿論思い出映像がパソコンで編集されるに至るまでの過程には、そこへ集められる資料や撮影など多くの人の手が掛かっており、決して個人レベルで完

成させられるものではない。故に人々は感動し納得のいくものとして受け取ることができはざである。しかし今回望まれたことは、一つの作品や催し事に、学生達が短期大学部や大学という範囲を超えて協力し、大学全体としての活動を実際の目で見、音で感じることで、そして、その実践の成果を現実には地域の方々に披露するという「学内連携」+「地域連携」の効果ではないだろうか。

そこで、今回初めて行われた本実践をどのような過程で行ったか、また実施された卒業式の演奏の結果から「学内の連携」の形について考えてみたい。

1. これまでの経緯

(1) 卒業式について

学校行事の中で卒業式は学内の最大のセレモニーである。本学でも伝統的な式典(下記式次第参照)に加えて、大学紹介写真展示と、キャンパスライフメモリーと称して思い出映像を編集したものをプロジェクターで映写し、大学生活の思い出を振り返るという試みをここ数年行っている。

【例年の卒業式 式次第】

- 1) 開式のことば
- 2) 学位記および卒業証書授与
大学院1名、学部1名、幼教1名、

キャリア1名, 専攻科1名
(BGM/ピアノ生演奏:音楽担当教員)

- 3) 優等賞等紹介
(BGM/ピアノ生演奏:音楽担当教員)
- 4) 学長式辞
- 5) 理事長お祝いのことば
- 6) 来賓お祝いのことば
- 7) 卒業生代表のことば
学部/経情1名, 短大/幼教1名
- 8) 閉式のことば

出席者は地域代表等来賓方々と卒業生の父兄で、近年は父兄の出席者がかなり増えている。しかし季節柄、寒さや関心度の度合いからしても、退屈しない適度な時間配分でできるだけ簡素に仕上げることが根底にあったように見受けられた。今回の試みは其中で感動する場面を追加しようとするものであり、全体の構造を考えながらバランスという点に配慮が必要であろう。

(2) 幼児教育・保育科の演奏の

取り組みについて

本学に開設されている学部や学科の中で、「音楽」を授業で履修するのは幼児教育・保育科のみである。故に卒業式のようなセレモニーに於いての発表は、幼児教育・保育科の学生が主軸となっていくことは当然といえよう。幼児教育・保育科では「青い空コンサート」での合唱・合奏発表(2年生のみ)、また大学祭におけるゼミでの音楽発表(2年生のみ)、授業内での合唱発表(1年生のみ)など幼児教育者を目指すための数々の音楽的基礎力を学習している。特に毎年行われてきた「青い空コンサート」では、幼児から大人までが聞いて楽しめるようなバラエティーに飛んだ楽曲編成を行っ

ており、特に最近では日本の伝統を大切にしたいテーマで発表をしている(豊橋創造大学短期大学部『研究紀要』第21, 22, 23号参照)。そこでこの幼児教育・保育科の学生にとって、今回の試みは日頃の成長の成果を発表する機会として大変有意義なものと考えられることができる。

(3) 新しい卒業式、演出の構想について

卒業式で、何か発表できるもの(音楽)、地域連携、短期大学部や大学を超えた学内連携をキーワードに、新しい演出を模索した。自分にできることは、幼児教育・保育科で取り組んできた合奏や合唱をベースに連携を広げることであり、学内の協力を得て、まずは「できるところから始めよう」ということでスタートした。

協働という言葉が今日よく聞かれ、新聞の記事などにも頻繁に使われている。特に今回のように新しい形のを企画していくには、個人の範疇では当然運営仕切れず、多くの人によって進行されていくことである。ここで実際演奏を行う者としては「創造性」を持って実践を行い、それをシミュレーションして会場設定や当日までの準備、つまり卒業式を運営進行するのは事務局である。今ここでこの「協働」の関係を再構築し、つまり短期大学部と大学さらには学生と教員および事務局が一体となって卒業式を作り上げる「協働」が実現できると考え、漠然とではあるが、まず合唱を「演奏」できるよう下準備を始めることになった。

2. 卒業式演奏に向けての準備

(1) 曲目選択

「演奏」を行うということは、当然「練習」という段階が非常に重要であることは、

いうまでもない。特にある程度の人数が集まったの演奏であれば尚更なことである。卒業式で実行するのかもしれないのか、指導者自身を含め、学内は賛否両論のまま時間は経過していった。

本来卒業式といえば、「仰げば尊し」、「蛍の光」などがかつては定番であったが、今日の大学生の世代にこの歌詞の内容を理解できている学生がどのくらい存在するのかが常に議論となっていた。しかし日頃音楽という授業を持たない大学の学生などのことを考慮すると、曲目設定や演奏形式を決定することは大変困難であった。

学内行事「青い空コンサート」が12月初旬に終了し、練習時間的には限界がある。そこでこの「青い空コンサート」を題材に準備を始めることにした。この「青い空コンサート」は本学幼児教育・保育科が行うものであり、〈音楽部門〉では合唱・合奏が行われる。従ってここで用いた全員合唱曲を再度卒業式で挑戦することが最も無難と考え、これをベースに構成していくことを決定した。この曲は幼児教育・保育科2年生全員（113名）が全員で二部合唱したものであり、「青い空コンサート」が終了してから卒業式までに3ヵ月あるが、学内にて多くの学生に新たな練習時間を設けることは不可能であるため、この曲を選択することは止むを得ないことであった。

(2) 問題点

①「青い空コンサート」は幼児教育・保育科の2年生で行うものであることから、今回の場合卒業生がこの演奏を行うことになる。通常卒業生は在學生に送られる立場で「演奏」を聞く状態が一般的であるため、それを卒業生がどのように受け

取るのであろうか。

- ②在學生が同様の合唱曲を練習し、卒業式に参加することは、授業終了の時期であるため、音楽の授業を経験している幼児教育・保育科1年の学生も時間的に不可能である。
- ③大学や他の短期大学部（キャリアプランニング科）の学生は授業で音楽を経験することなく、あのようなセレモニーの場で声を出して歌えるのであろうか。
- ④幼児教育・保育科の二部合唱であるイメージが強くなり、卒業生全員の「卒業の歌」として受け取られないのではないのか。

(3) 対処

(2)にいくつか挙げた問題点を少しでも軽減するため学内の意見を職員や教員などから収集した。

- ①初めの考案通り幼児教育・保育科での二部合唱を主に行い、歌詞を式次第に載せ用意してはどうか。（事務局職員）
- ②事前に授業やゼミで学生に呼び掛けをし、その曲を各自で練習するようにする。（教員）
- ③古いといわれるかもしれないが、「仰げば尊し」などの日本古来のものにすれば、何とか学生も口ずさむのではあるまいか。（事務局職員）
- ④合唱ではなく、有志でできる楽器などの演奏にしてはどうか。（教員）
- ⑤卒業式の会場は大寒さが厳しく、できるだけ円滑に行うようにしてきたので、新しいプログラムを増やすことには反対である。（事務局職員）
- ⑥大学の中には軽音楽サークルがある。そのサークルの学生達に呼び掛けをし、卒

業生に少しでも合唱参加ができるよう応援(当日)を頼んでどうか。(教員)

—他同意見のため省略—

上記の意見はどれも同意できるものであったが、ほとんどが消極的に考え始めると実行不可能ではないかと考えられた。しかしその中でも⑥の意見は非常に建設的なものであると思われ、動員を働きかけることで結果に繋がるのではないかと微かな期待が持てる意見であると判断し、実際に呼び掛けてみることにした。

(4) 軽音サークル部員との面会

2006年の12月初旬本学学生課の職員を通して、部員と面会が実現した。そこに出席したのは、

軽音サークル部長、副部長、教務課長、学生課職員、音楽担当指導者

であった。今回の卒業式の取り組み方を簡単に説明し、彼らに協力してくれるかどうかを質問した。

そのときの彼らの回答は次のようであった。

「僕らが参加することで大学の力になれるのであれば参加したい。」

「軽音サークルの自分たちの直接の先輩達に祝福・お礼をする意味からも参加したい。」

「問題は自分たちに音楽的基礎知識(読譜など)がないところである。」

この彼らの発言は今まで消極的に捉えていた問題部分を吹き飛ばしてしまう説得力を持っていた。

また軽音サークルの部員達はギターやドラムを中心に活動を行っておりそれを活用した楽器部門構成が成り立てばさらに充実したチーム編成も可能なのではないかと考

えた。

そこで演奏は合唱だけに留まらず、合唱の伴奏および楽器のみの演奏(合奏)もを行い、大学の学生を含めた学内全体の演奏が実現できるのではないかと提案し、まずは幼児教育・保育科1年生の学生に楽器経験者を募ってみた。結果14名の学生の参加が実現し、在学生のみの演奏も行う準備が整った。さらにこの試みに自ら参加を希望した短期大学部の教員を含めそのゼミ学生も参加希望があり、予想を上回ったチーム編成となっていった。

日頃学内では、専門領域の中で物事が進められていくことが多い中、大学の学生によって画期的な意見を聞いたことは、彼らが大学生活に於いて、サークル活動やその他人間関係に於いても前向きなコミュニケーションを行い学んできている結果なのではなかろうか。彼らとの面会が大学全体での合同演奏を行うきっかけとなった。

3. チーム編成とプログラム構成

(1) 卒業式プログラム(案)

いうまでもなく、学校行事は事務局(教務課、学生課、庶務課など)と教員、その他大学内における関係者によって運営される。時には地域の方の協力もあるかもしれない。そんな中での卒業式は厳粛且つ心に残るものとなることが理想であろう。今回の演奏が加わることで、今まで培ってきた伝統を残しながら、視覚的にも心情的にも内容が充実したものとなることが狙いである。

卒業式全体のプログラムは昨年を参考に次のようなものが案として作成された(教務課より)。

学位授与式・卒業式（18年度案）

1. 日 時

平成19年3月18日（金）午前10:00開式
 教員集合 9:30 / 学生集合 9:30
 来賓保護者受付 9:00～9:30

2. 場 所

豊橋創造大学
 体育文化ホール 2Fアリーナ

3. 式典の内容

①大学紹介写真 展示

[担当：入試広報室]

1F来賓控室等に本学を紹介する写真、
 パネルを展示

②吹奏楽演奏で来場者を出迎え

[演奏指導担当：

幼児教育・保育科音楽担当教員]

開式15分前～5分前迄の入場時の生演奏

③キャンパスライフメモリー上映

[映像制作担当：サポートセンター有志]

開式5分前に会場を暗くし、プロジェ
 クターで映像映写

4. 式次第

1) 開式のことば

[司会：本学非常勤講師]

2) 学位記および卒業証書授与

大学院1名，学部1名，幼教1名，
 キャリ1名，専攻科1名

BGM／ピアノ生演奏

[演奏：幼児教育・保育科教員]

3) 優等賞等紹介

BGM／ピアノ生演奏

[演奏：幼児教育・保育科教員]

4) 学長式辞

5) 理事長お祝いのことば

6) 来賓お祝いのことば

7) 卒業生代表のことば

学部／経情1名，短大／幼教1名

8) 卒業の歌

[演奏指導：幼児教育・保育科音楽担当教員]

9) 閉式のことば

5. 備 考

手話通訳者の派遣2名（豊橋市登録手話
 通訳者へ依頼）

※聴覚障害学生（学1名，短1名）の座席を配慮

6. 終了後の行事等

(1) 同窓会入会式（学部・短大部）

（アリーナ）

(2) 卒業全体写真撮影…教員全員参加

（アリーナ）

(3) 証書配付等…ゼミ教員による配布

○大学院 ○学部

○幼児教育・保育科

○キャリアプランニング科 ○専攻科

(4) 卒業記念パーティー

[卒業記念事業委員会主催]

時間配分から考えると楽器のみの演奏を
 式中に織り込むことはこの段階では難しく、
 また今回の演奏の経験とレベルも把握でき
 ていないことから考えても避けるべきであ
 ろう。従って式直前の上場のための演奏タ
 イムとして設定することが最適と考えた
 （卒業式案3の②）。ここに至るまでの幾度
 とない事務局職員からの助言やデータ，資
 料は，無くてはならないものであった。こ
 こでも学内の連携は大変必要とされていた。

(2) 楽器の編成

今回のように少ない限られた時間内に、限られた楽器の数でメンバーを編成し発表を行うことは極めて困難なことである。しかし与えられた条件の中である程度納得するものを完成させるためには、選曲と編曲がキーポイントとなる。今回選曲したい楽譜に必要とされている楽器の数や種類には到底足りておらず、それをどう編曲していくかが今回の作品の評価を決定するのである。幼児教育・保育科の学生で用意できた楽器の種類は次のようであった。

フルート3, クラリネット6,
トランペット2, アルトサクソ3,
テナーサクソ1, ホルン1,
キーボード2, ピアノ, パーカッション

必要であるにもかかわらず足りていない楽器は、「ホルン」「ユーホニウム」「トロンボーン」である。そこでこれを軽音楽サークルの学生達の「ベースギター」「エレキギター」で演奏するように配置してみた。

〈追加した楽器〉

エレキギター (大学1名),
ベースギター (大学2名),
アコースティックギター
(幼児教育・保育科2名),
テナーサクソ
(短期大学部キャリアプランニング科1名)

不足する低音部を、ベースギターで補強し、エレキギターはオブリガート、アコースティックギターは和音の充実感を強化するという案である。この演奏方法が可能となれば合同演奏が成立することとなる。

(3) 選曲

・式直前入場までの曲目

「G線上のアリア」¹⁾

「Amazing Grace」²⁾

「You raise me up」³⁾

式の前であることから、雑談あり、笑い声あり、色々な状況の音があるため、クラシックでいえば古典のものに類するものが適していると思われる。またこの年の思い出となる曲を取り入れ、全体としては、歓談するのに適したなだらかな曲風をイメージした。

・アナウンスのBGM (式中)

「Amazing Grace」

卒業の唄を演奏するためには、それを演奏するに当たって心の準備というものが必要である。そこで司会者(本学非常勤講師兼FMラジオアナウンサー)に、今回初めて詩の朗読を依頼し、そこに演奏をマッチングするという厳粛なセレモニーの雰囲気から、「合唱」を行うための、感情を表現できる環境作りをした。ここでは曲の速さとその中に入る朗読の文字数の打ち合わせが重要なポイントであり訓練されたアナウンサーの助言のもとに構成された。

1) バッハ作曲で「G線上のアリア」に関しては古典の楽曲として儀式にはよく使用されている。

「管弦楽組曲第3番BWV1068 (1717~1723作曲)」の愛称で、19世紀後半ニ長調からハ長調に移調するとヴァイオリンのG線のみで演奏可能なことが発見され、ヴァイオリン独奏用に編曲された。

2) 「Amazing Grace」は、古いイギリスの黒人霊歌として知られており、このような儀式に頻りに用いられている。

3) 「You raise me up」は平成18年のオリンピックで荒川静香氏が金メダルを獲得した際の演技の曲である。

・卒業生の歌、二部合唱と楽器演奏

「君をのせて」

「君をのせて」は宮崎駿作アニメ「天空のラピュタ」の主題歌である。作曲は久石譲で数々の名曲を残している。これらの久石の曲は、楽器のみで演奏しても、また歌が主で演奏しても、それぞれ十分一つの作品として成り立つ完成度を持っていると感じさせるものである。「青い空コンサート」にこの曲を選曲した第一の理由がここにある。編曲者の技量にもよるが、歌とピアノ伴奏、合唱とピアノ伴奏、旋律楽器とピアノ伴奏、合唱と楽器演奏、合奏のみ（吹奏楽等）、そのどのパターンで演奏してもそれぞれの良さがあり、演奏者の演奏技術の差こそあれ、久石が作曲したメロディーは常にその感動を忘れずに響いている。今回合唱合奏両者の演奏の見せ場をつくるために、合唱と合奏での「君をのせて」を演奏した。また歌詞には「父さんがくれた熱い思い」「母さんがくれたあの眼差し」というフレーズが歌われ、「20歳と22歳の成人した若者が果たして心動かして歌うことができるのか」という意見も一部流れた。しかし今日大学の卒業式に参加する父兄の数は数年前よりも遥かに多く、卒業式に参加している父兄の満足度や一体感を高めるきっかけとなるのかもしれない。これに関しては、わずかな期待を持ってこの選曲を決意した。

(4) プログラム（最終決定）

数々の迷いや試行錯誤の結果再度プログラムの修正を事務局と教員で行い、次のように決定した。

ここでは3の〈式典の内容〉と4の〈式次第〉の表記のみをする。

学位授与式・卒業式

3. 式典の内容

①大学紹介写真 展示

[担当：入試広報室]

1F 来賓控室等に本学を紹介する写真、パネルを展示

②吹奏楽演奏で来場者を出迎え

(在学生のみの演奏)

[演奏指導担当：

幼児教育・保育科音楽担当教員]

曲目 Amazing grace

G線上のアリア

You raise me up

開式15分前～5分前迄の入場時の生演奏

③キャンパスライフメモリー上映

[映像制作担当：サポートセンター有志]

開式5分前に会場を暗くし、プロジェクターで映像映写

4. 式次第

1) 開式のことば

[司会：本学非常勤講師]

2) 学位記および卒業証書授与

大学院1名、学部1名、幼教1名、キャリア1名、専攻科1名

BGM/ピアノ生演奏

[演奏：幼児教育・保育科教員]

3) 優等賞等紹介

BGM/ピアノ生演奏

[演奏：幼児教育・保育科教員]

4) 学長式辞

5) 理事長お祝いのことば

6) 来賓お祝いのことば

7) 卒業生代表のことば

学部/経情1名、短大/幼教1名

代表のことばが終了後、司会者による詩

の朗読, それに合わせて演奏を行う。

(Amazing Grace)

8) 卒業の歌

[演奏指導: 幼児教育・保育科音楽担当教員]

生演奏に合わせて「君をのせて」を幼児教育・保育科のリードで卒業生全員の合唱, 楽器演奏は卒業生・在学生全員

9) 閉式のことば

4. 実践〈練習について〉

過去に例の無い試みの中で, メンバーの設定と曲目が決定し, 次は実際の練習である。学内の学部学科それぞれの日程もあり, さらに春休み期間に入ることから練習の日にちを設定することに支障があった。元々授業外活動であり, 学生自らの活動とは異なることから, こちら側から強要することも避けるべきであろう。いずれにしても大きな期待をすることなく練習日程を次々と臨機応変に予定した。

(1) 学生数〈総数28名(内1名教員)〉

学年	学 科	楽 器
1(短)	幼児教育・保育科	フルート
		クラリネット
		パーカッション
		フルート
		フルート
		キーボード
		クラリネット
		トランペット
		トランペット
		クラリネット
		アルトサックス
		キーボード
2(短)		ピ ア ノ
		クラリネット
		クラリネット
		テナーサックス

2(短)	幼児教育・保育科	アルトサックス
		ホ ル ン
		ピ ア ノ
		クラリネット
		アルトサックス
2(短)	キャリアプランニング学科	テナーサックス
2(大学)	経 営 情 報 学 部	ギター(エレキ)
		ギター(ベース)
		ギター(ベース)
1(短)	幼児教育・保育科	ギ タ ー
		ギ タ ー
教員	短 期 大 学 部	アルトサックス

(2) 練習回数及び出席率

回 数	出席人数(28名中)	出席率
第1回	10名	35.7%
第2回	15名	53.5%
第3回	19名	67.8%
第4回	17名	60.7%
第5回	11名	39.2%
第6回	22名	78.5%
第7回	20名	71.4%
第8回	25名	89.2%

前半第1回(平成19年1月29日)から第5回(2月27日)まではほぼ出席した学生が在学生であり, その在校生の中でも欠席をする理由は, 「定期券が切れてしまった」「バイトがどうしてもはずせなかった」などであった。また卒業する学生については, 就職先の研修がある学生以外は, ほとんどの回に出席していた(約3名)。

後半第6回(3月6日)から第8回(3月15日)は本番直前のためか, 上記の数字通り70%以上の出席率であった。しかも後の30%近くの学生は研修中の学生であり, 在学生についてはほぼ100%であった。

(3) 練習内容

①基礎練習

本来吹奏楽などの練習は、ロングトーンや音階練習といった基礎練習が当然行われ、より確かな技術を目指すメニューが必要である。しかし今回のように時間の設定が困難であり、短い昼休みの間に練習を行う場合などはいきなりその曲を始めるという進行しかできない場合が多かった。従って大切な基礎練習は全て個人の範疇で行うことで進められた。

②楽曲練習

合奏を行う際に最も大切にしなければならないことは、自分自身の練習は基より、自分以外の演奏者がどう演奏しているかを知ることである。そして音を通してコミュニケーションを図っていくことである。今回の場合、同学科だけでなく、学年の違いや短期大学部、大学の違いもある。そこで細かい技術指導も含め、互いの名前を覚えられるよう毎回指導者ができるだけ全員の名前を呼び、それぞれに良い面悪い面の指導を行った。しかも完全な吹奏楽調に留まることなく、あくまでも軽音楽サークルの要素やその他の要素をそれぞれに生かしたこの大学独自の合同演奏として行っていくことを根底に置きながらの指導を目標とした。

譜読みはそれぞれの個人練習で行い、吹奏楽経験者は問題点や疑問点を個々に挙げながら合同練習に参加した。問題は楽譜が読めない軽音楽部の学生についてであったが、彼らはパソコンを使用し、ベースギターの指の番号を楽譜に書き込み、初練習には全ての楽譜に数字が書かれていた。このことは学生自らが自分のできる読譜方法で努力をしており、吹奏楽経

験者達との不具合が生じるのではないかとこの危惧を直ちに打ち消した。これも学生の意欲によるものであり、貴重な学習方法が演奏の完成に繋がっていった。

5. 結果と出席者の感想

連携といっても過去に例のないことに挑戦することは不安であった。特に卒業式は学内の最も重要な行事の一つである。また学外の来賓も含め地域の方々にもその祝福や感動、また感謝の意を表現する儀式を共に共有して頂く場面である。芸術への感情や感性は個々に異なるとはいえ、不愉快な感覚を残すことは絶対に避けなければならない。それは技術のレベルや場に合った表現をどうするか、また視覚的にどのような印象を受けるか、といった要素が考えられる。それぞれの場面での結果は次のようであった。

(1) 開式前の演奏

約15分間の演奏は時計で計ってプログラムしたよりも長く感じられ、演奏者だけの時とは演奏時間にずれがあった。入場時間の人の集まり具合や着席までの時間などが予定よりも伸びていた。従って準備した曲目では時間が足らず、3曲の持ち曲を三回演奏する結果となった。

演奏者の学生達は前座としてリラックスして演奏を行っていたように見受けられ、ほぼ聴衆にも違和感なく受け入れられていたようであった。

〈アンケートより〉

【学生、ご父兄、教員、事務職員】

- ・曲数をもっとあればよかった。
- ・もっと観客に聴いてもらえるように、教職員達からも、声掛けをしてはどうか。

- ・色々な楽器があり、バラエティーに富んでいた。
- ・機械からのBGMでなく、生の演奏に感動した。

(2) 卒業生の歌

卒業生の歌への導入として、司会者による「詩」の朗読は楽器演奏のBGMで読まれた。式としては一番の山場であるので、このBGMの曲を以て、会場にいる人の気分の高揚を図れるよう演奏した。体育館という会場であることや人の配置など、演奏に必要な音響効果は満たされていない。しかし一人でも多くの卒業生が口を開け歌うことができるようセレモニーの演出をしっかり行う必要があった。結果「幼児教育・保育科の合唱」というイメージはやはり拭い去れなかったようである。

〈アンケートより〉

【学生、ご父兄】

- ・「君をのせて」の曲を知らなかった。
- ・指揮が見えなかったので、どこで入ればよいのかわからなかった。
- ・周りが歌わないので、歌いたかったけれど歌えなかった。
- ・歌うのは恥ずかしかったけれど、幼児教育・保育科の学生が二部合唱しているのを聴きすごいと思ってつられて歌った。

このように、卒業生達は歌うことを拒んで歌わなかったのではなく、歌う方法やタイミング、周りの様子などのために歌えなかったと考えられる。これは大学全体の学生において同じであり、自分の学部や学科の後輩達や同級生、更には教員が演奏に参加し祝福しているという繋がりによるものも大変大きかったのではなかろうか。決し

て満足のいく音量や形式ではなかったかもしれないが、少なくとも会場の学生達がこの曲を通して、漠然とはいえ連帯感に似たものを感じ取っていたと考えてよいのではなかろうか。

(3) 退場の演奏

全てのプログラムを終了し、父兄や来賓の退場時に式前と同じ曲目を演奏した。退場までに約10分程度、3曲を二回り演奏した。式前の静粛且つ厳粛な気品を求める前座とは違い、全員合唱の後ということもあり、華やかに終了することで式を完結した。

(4) 式全体のアンケートより

今回は式終了後、一言感想を38名より収集した。その種類と数は次のようである。

- 教員・・・10名
- 事務局職員・・・8名
- 学生・・・5名(大学)
5名(短期大学部)
3名(専攻科)
- 父兄・・・7名(大学2名,
短期大学部3名,専攻科2名)

【来賓】

- ・昨年までとはまた違い、よかった(その内容の詳細は聞けなかった)。
- ・学生を個人的に知っているわけではなかったのですが、音楽があってよかった。
- ・生の演奏があってあたたかい式であった。

【父兄】

- ・子どもの成長を、歌を聴くことで大変感慨深く思った。
- ・私自身が知っている曲であったので、口ずさんでいた。
- ・学生達は前を向いていたのでよく聞けなかった(後部座席)。

【教員】

- ・曲目が少ないのではないかと、できるならもっと色々聞きたかった。
- ・教員と一緒に演奏していたのが感動した。
- ・大学の学生が何人か参加しているのに驚いた。
- ・演奏席の配置に気を付けてできるだけ移動が少ないよう検討した方が良い。
- ・練習時間の設定は大変であったであろう。
- ・幼児教育・保育科に声が集中していた。

【学生（大学）】

- ・歌うことがわかっていれば、カラオケ等で練習してきた（事前に掲示済み）。
- ・大学の学生が混じていたので、大変嬉しかった。
- ・生で演奏があったので、鳥肌がたった。

【学生（短期大学部）】

- ・思い出の曲なので歌えて嬉しかった。
- ・卒業生だから、送られる歌が聞きたかった。
- ・生の演奏を目の前で見ていると、感動した。
- ・羽織・袴で演奏は大変そうだった。
- ・大学の人達にももっと歌ってほしかった。

【事務局職員】

- ・教員が演奏していたので、嬉しかった。
- ・来年できれば参加しようかと考えた。
- ・卒業生が演奏（楽器）に参加していたので、上下（先輩後輩）の繋がりができていると感心した。
- ・生の演奏にはそれなりの良さがあるのではないかと。
- ・二部合唱になったところなどは、ぞくぞくして感動した。
- ・もっと職員や教員も参加してもよいのではないかと。

*先に記述したアンケート文と重複するものは入れなかった。

これらのアンケート結果から見ても、今回の演奏（合唱・合奏）を悲観的に見る意見はほとんどない。つまり今回の無謀とも取れる演奏チームの編成と演奏は、学生達の努力によって今後の可能性を十分証明できたことになる。卒業式という合同セレモニーは大学生活の中でたった一度の学内合同イベントである。国境のない、差別の無い「音楽」という共通語を通して、学生たちは自分なりの方法で歩み寄り、演奏をすることでコミュニケーションを深め、今回の目標を達成していった。

その意味からも彼らの影の努力や意欲を十分に評価しなければならない。

6. 今後の課題**(1) 連携の在り方**

現在地域連携がさかんに推進されており、育児、介護、食生活、健康、文化などあらゆる面での分野の活動が、地域によっては行われつつある。本学に於いても地域連携についてはさかんに研究を行っている。そんな中での今回の卒業式演奏は大変意義のある試みであったと考える。地域連携、地域貢献をより円滑に行っていくためには、当然学内連携が充実しているべきであり、またそれは学外に向けて発信する際の、重要な要素の一つになるであろう。

今回は専門性を越え、年代を越え、それぞれの主体性を持ちながら、一つのチームの形を完成した。これは正に学内連携の一つであり、連携があったからこそ実現できた試みなのである。特に学生達の努力と意欲なくしては実現できなかったことであ

り、それはアンケートの結果からもわかる通りである。

短期大学部のみ、大学のみ連携を持った試みは今までにも行っている。しかし今回学生教職員も（演奏、アナウンス、会場演出）加わっての連携活動は初のものであったと思われる。このような文化的な活動を一丸となって学外へ発信していくことは学内の団結力と大学のイメージアップにも大きく関わることであろう。この部分的な学内連携を今後継続し、確かな連携を定着できるよう、さらに研究を続けなければならない。

(2) 次年度に向けて

今すでに19年度の活動がスタートしている。メンバーもほぼ決定した。昨年よりも大学の学生の参加が増え、7名となった。しかもそのうちの2名は軽音楽サークル以外の学生であり、自らの希望で参加している。また、教職員の参加も4名となり学内全体で作り上げる卒業式として意識が高まったことが見受けられる。

しかしその反面短期大学部卒業生に関しては、「送られる側」として、ゆっくりと演奏が聴きたいという意見もはっきりと飛び出している。去年とは違った部分を作りながら、事務局、学生、教員と試行錯誤の案を繰り返し、19年度の卒業演奏の完成を目指している。決められたパターンを分担して行うのではなく、よりよいものを目指して意見交換を重ねることこそが、本来の学内連携であることを忘れずに行っていきたい。

参考文献・参考楽譜

- ・ J.S.Bach 「Air from the suite no.3 in D-dur BWV 1068 for Cello and Piano (Leonard Rose)」/INTERNATIONAL MUSIC COMPANY
- ・ J.S.Bach 「Air from the suite no.3 in D-dur BWV 1068 for Cello and Piano (Zimmerman)」/INTERNATIONAL MUSIC COMPANY
- ・ Johann Sebastian Bach 「AIR ON A G STRINGS」/Beriato
- ・ Michael Brown 「YOU RAISE ME UP」/出版社Hal Leonard
- ・ Brendan Grahamrolf Vovland 「You Raise Me Up」 Winds Score
- ・ J.P.Carrell, D.S.Clayton 「ニューヒットコーラス女性版 Amazing Grace女性3部合唱」/コーラスアベニュー出版 1993年
- ・ 安永憲一郎著 「宮崎駿アニメ主題歌合唱曲集」/ドレミ楽譜出版 2005年
- ・ J.S.Bach 「G線上のアリア」/ミュージックエイト 2001年
- ・ 源田俊一郎編曲 「二部合唱曲(となりのトトロ)」/カワイ出版 2006年
- ・ 久美薫著 「宮崎駿の世界 1979～2004」/鳥影社 2004年
- ・ 大柿かおる著 「合奏アラカルト」/全音楽譜出版社 1998年